

## 7月例会報告

(石坂レポート)

「浦和レッズサポーターを追って」 清水諭 (筑波大学)

<清水諭氏によるプレゼンテーション>

### ■自己紹介■

スポーツ社会学の領域で研究を展開。池田高校野球部のフィールドワークを通して、「若者らしさ」、「高校生らしさ」といった「物語」がメディアを介してどのように作られていくのか、そしてその「日本文化」(甲子園野球と日本人)の独自性がどのように歴史的に作られてきたのか、ということの研究している。(『甲子園野球のアルケオロジー』新評論, 1998)

現在は、甲子園野球に見られた物語がサッカーではどのように違うのか、そしてそれはどのようにして作られていくのかを調査している。研究対象は浦和レッズのサポーター。昨年の研究報告では、浦和におけるサッカーの歴史と企業としての三菱自動車(飯田義明氏(専修大学)が担当)、サポーターへのアンケート調査、並びにサポーターのフィールドワーク(清水氏が担当)をまとめた。現在もフィールドワークを続けている。

### ■問題提起■

明治以来、野球は日本のスポーツ文化の中心的役割を果たしてきた。野球選手であった人間がジャーナリズムに入り、ペンをとる。その過程で野球という「物語」が作られてきた。甲子園はその中でも一番大きな役割を果たしたと言える。

我々は甲子園野球を見る際に、汗と涙にまみれて一生懸命プレーする高校球児のイメージを重ねながら見ている。そのイメージは自分の体験の上に積み重ねられ、メディアによって高校野球の「物語」として、すなわち、「若者らしさ」、「高校生らしさ」として作り出されていく。甲子園はその「物語」が重層的に作られている場と言える。

池田町のフィールドワークを通して、その「若者らしさ」、「高校生らしさ」は、メディアによって作られた実体のない「物語」であることが明らかとなった。しかしながら、我々日本人は、再生産され続ける日本独自の「物語」から脱出することが出来ない。それを最も端的に表しているのが甲子園野球と言える。

98年、ワールドカップサッカー、フランス大会でも同様のことがおきていた。1勝・1敗・1分けという数字の先行、カズの代表落ち、歴史的なワールドカップ初戦、アルゼンチンへの善戦、クロアチア戦の空前の高視聴率、敗退決定、歴史的初ゴール、全敗、戦犯探し、城に対するラモスの発言……。どれ程観る目が成熟しても抜け出すことのできない「物語」がそこには存在している。

一方で、サッカーの場で作られる「物語」は野球と同じであるのか? 日本的なジャーナリズムはサッカーに対してどのような意味を付与しているのか? サッカーを観ている人々、すなわちサポーターはどう解釈しているのか? といった問題が提起される。それらのことを浦和レッズ・サポーターのフィールドワークを通して明らかにしていく。

## ■浦和レッズ・サポーターのフィールドワーク■

7月20日、「浦和レッズ・サポーター・2000年シーズンを語る会」にて。Jリーグ事務局長佐々木氏は、「レッズ、エスパルス、アントラーズはすばらしい応援を繰り広げている」と発言。レッズはJ2に降格したにも関わらず、2万人のサポーターが集まる。そこには何かがあるはず。

サポーターを群衆としてみるのではなく、サッカーが様々な人生の中で展開される一人一人としてみる。

ゴール裏で応援する人々がどのように生活しながらやっているのかを、サポーターと共に行動し、応援し、インタビュー、すなわちフィールドワークをしながら探る。

## ■日本のサポーター■

海外のサポーターは、暴力、人種、階級、階層、学歴の問題が大きく出ている。日本のサポーターはそういったものがあまり関係ないのでは。むしろ中心にあるのは日本における「男らしさ」というものではないか。

## ■浦和レッズの誕生と企業基盤■

Jリーグの発足当時、チーム運営について。球団設立に際して、埼玉県や浦和市といった地域であるよりも、サッカーを通じた人脈が非常に大きく作用していた。早稲田大学→古河電工→三菱重工（日本リーグ時代の）のネットワークの中で出来上がってきた組織を基盤として誕生した浦和レッズ。

## ■サポーターの意識■

サポーターへのアンケート調査から、「レッズのサポーターであることを誇りに思う」、「埼玉県民としてレッズを誇りに思う」人が非常に多いことが明らかになった。また、レッズを応援することで浦和市に対して、「特別意識するようになった」り、「サッカーの町になった」と感じている人が多い。

しかし、アンケートでは明らかにならない、「サポーター達が自分の人生にサッカーをどのように位置付けているのか」といった問題は、実際にサポーターを追いかけて調査しなければなかなか見えてはこない。

## ■サポーターの話から■

「浦和に対する愛郷心の高さがある」、「高校の友達とつきあうよりおもしろい。いろんな人がいる」、「毎回水・土と試合の日に浦和に来ればいつものメンバーに会える」という言説は非常に重要な意味を持つ。そこから「地域というのはここにいる人（駒場）のように、いろいろな世代を越えて人と出会えるところ。若者達はいち早くそれをつかみ、そこに集積することでいろいろなことを学」んだり、「サポーターがサポーターを引きつける。ゴール裏の男臭さに男が憧れてきた」のではないだろうか。

## ■大野勢太郎氏の存在とMDP■

ラジオパーソナリティー・大野勢太郎氏。毎朝、ラジオ番組「NACK5」にてスポーツ全般のこと、浦和市の生活のこと、浦和レッズのことを話す。大野氏を中心にして、浦和レッズをどのように育ててい

くのかといったことも議論される。大野氏を中心とするのは「大きなメディア」。これに対して、試合当日に配られるMDP（マッチ・デー・プログラム）は「小さなメディア」として機能する。レッズサポーターの応援の仕方などに、サポーター自身が意見を寄せ、議論する場となる。この両者を介しながら、浦和への強い思い、男らしさへの憧れといったものが複雑に絡み合っただけでサポーターは存在している。

## ■球団の今後■

三菱自動車とダイムラーの提携。他の会社から資金を集め、経営規模を維持しながら徐々に、三菱自動車が浦和レッズの持ち株を減らす方向。（現在の90%から50%へ）また、球団のマークから三菱の「M」をはずし、企業色を薄めてソシオのような組織に移行する動きもみられる。サッカーを基盤にしながら、浦和近辺の人達に生活としての場を提供できるような、社会運動としての要素もみられつつある。

## ■サッカーの可能性■

野球にはないクラブを土台とした民衆に対する、また、民衆を主体とした新たな動きを作り上げる力がそこにはあるのではないか。

### <共同研究者飯田義明氏の補足>

浦和、市原、名古屋などの研究を平行しておこなってきた。その比較において浦和は、企業主導というよりは、周りの人の関心が非常に強いと言える。歴史的にサッカーがあった街という感じがする。潜在的に特殊な地域性をもった土地であったのかもしれない。

### <信藤健仁氏のコメント>

選手時代、90年に広島から浦和（三菱自動車サッカー部）に移籍。三菱は当時調布にグラウンドがあった。サッカー・プロ化の動きがあり、浦和では青年会議所が中心になって浦和で三菱をバックアップしようとする動きがあった。その中で最も成功したのが、グループで応援の団体を作ってもらい、そこに三菱のフラッグと認定証を提供する方法であった。これが浦和の第一歩と言える。青年会議所などの働きかけで、浦和、調布でフラッグの数、すなわち応援者の数を増やし続けた。92年のナビスコカップで、その数は既に圧倒的になり、もの凄い雰囲気スタジアムに醸造されていた。自分達が応援のグループであるというステータスを持つことで、簡単には崩れない何かが芽生えていた。そこが他のチームと決定的に異なる。

### <ディスカッション>

■浦和という土地の特異性～サッカーどころとしての浦和という地域性、企業としての三菱との関係■

○なぜ浦和に三菱を引っ張ってきたのか？

→埼玉の中でのスポーツの棲み分け（上尾は野球、大宮はラグビー）があり、浦和はサッカーの街だった。歴史的背景があるのに、プロのチームができないというジレンマ。加えて、三菱はプロ化に出遅れて本拠をもっていなかった。両者の利害が一致。市民層にサッカーをする人が多いという基盤もあった。

■浦和の成功＝鹿島との比較■

## 【浦和】

→三菱という企業名をあまり表に出さなかったからでは（ヴェルディ川崎の失敗例）。その意味では鹿島も同様に成功した。しかし、両者の決定的違いは、三菱が当時1部だったのに対し、住金は2部であったこと。鹿島はチーム運営が非常に危惧されていた。

## 【鹿島】

住金が鹿島地域の活性化を図っているときにJリーグの話が来た。タイミングが合っていた。

ジーコという象徴的存在。しかし、開幕当初はサッカーには違和感があった。企業のスポーツということで住民がさめているところがあった。経営陣は何も考えていないようなところがあった。サポーターをどうするかということではなく、まずチームを強くする戦略を採った（実力を示すこと＝勝つことでサポーターを獲得するしかなかった。もともとの基盤の不在）、というより採らざるを得なかった。

## ■いい選手と、魅力のあるチーム■

→いくら強い選手がいてもサポーターがつかない。ネームバリューのある選手が必要。（代表選手など）

→チームのマネジメントとサポーターの獲得過程～浦和、鹿島は両極の成功例

## ■浦和の地盤沈下■

○高校サッカーの低迷（県代表を大宮に奪われるなど）、帝京など近辺の高校への選手の流入があり、浦和自体が盛り下がっていた。そこに浦和の名前を冠したレッズが登場したことの意義

→浦和というネームバリューの形成。もともと浦和にいた人は、高校サッカーの低迷からの脱出を期待し、新しく来た人はレッズが来たことで浦和に移り住む、というケースも考えられないか。

→三菱ということではなく、「赤いレプリカ」をきた仲間たちという意識の方が強い？

→浦和のサポーターの心の中にあるサッカーの見方の深さと、企業側（三菱という）の意識のギャップが最近よくみられるようになった

○浦和という土地の特殊性

→人口基盤が大きい。レッズが生活の中に徐々に入り込んできているのでは。

（レッズ主催のサッカー教室に親子で参加する）

## ■サポーターになることは必ずしも地域に根付いているわけではないのでは？■

→例えば、選手の同級生であったり、ある選手が自分の高校出身だったことで、その選手と共にそのサポーターになって根付くのでは。しかし、自分の友人を誘ったり、それが固定されていくと自前のサポーターが出来ていくという可能性は強い。また、そこから選手を取り巻くタニマチの存在と、選手との関係が出来上がっていく。

→選手と後援会。試合前日に、コンディショニングに関係なく後援会で飲まされてしまう現状。「自分を応援している」という意識のしぼり。サポーター組織が必ずしも良い方向にだけ作用していないという例。

## ■「物語」を作るメディアの制作者たちも結局はメディアにおかされた人たち？■

→当然、個人の経歴の中で自分の価値もある。メディアがあるのではなく、何かを書いたり、発信する個

人が問われる社会でなければならないはず。現在の日本は、それを敢えて問うていない社会と言える。情報のリテラシーの問題も生じる。すなわち情報を自分で判断して受け入れなければならない時代。→視聴者とメディアの制作者の共犯関係。制作者も敢えて慣例を曲げようとはしない。それが日本の「物語」の形成であり、日本独自の文化？

## ■他の地域の特徴■

### 【清水】

サッカーのことをやたらと知っている人が多い。小学校からサッカーをして積み上げてきたものがある。「サッカーの街」として、選手の進路、応援するチームなど、いろいろ選択肢が多いのでより複雑である。

○浦和と清水のサポーターの違い

→浦和（駒場）のサポーターは盛り上がる場所が違う。岡野、大柴などの全然入りそうにない場面で盛り上がりつつある。サポーターの質の違い。

→サポーターのサッカーに対する生活実感の違いでは？清水はつながりのある地域の中で、自営業の人が事務局をやっていたりする。清水でスタジアムにファンがこない一因。（観るよりやった方がいい）

→浦和ボーイズは特に荒い。しかし、サポーターの中でも荒い人たちと、穏やかな人たちが様々にいる。何がレッズのサポーターの特色なのかはつかみづらい部分ではある。応援は統一して行うが、その中にもいろいろある。また、2日前から並ぶ人もいれば、そのようなことをしない人もいる。その辺の重層性が面白い。

### 【磐田】

清水に磐田のサポーターが意外と多い。杉山隆一氏の流れ。サッカー選手が企業の下の実業団に入るときにコネを使う。ある特定の経路の形成。その結果、ある地域やファミリーのようなサポーターが選手にくっついてそのままサポーターになるケースが多い。

### 【名古屋】

サッカーの前に野球（中日やイチロー）がきてしまう名古屋の特色。サポーターの獲得は難しかった。結果的に興行に力を入れる体質になっている。（リネカーをよんだりといった）しかし、その興行も企業から派遣されてくるため、長いスパンでのつながりに欠ける。考えた活動を継続的に出来なかったという反省点。地域とのサッカーの普及活動と育成を目指す。Jリーグ百年構想に基づき、百年かけてレベルアップをはかればよい。サッカーのカリキュラムの充実、指導者育成を優先。

→「名古屋グランパスを考える会（サロン）」が必要！

## <第二部 サッカーの実践 於筑波大学多目的グラウンド>

5時より、グラウンドにてサッカーを行いました。前半は筑波大学スポーツ社会学研究室（中塚氏を含む）対サロン参加者。実際にサッカーをして汗を流す。これも重要なサッカーの実践ではないでしょうか。時間、環境の問題から、なかなかサッカーをする機会がないのが現状です。参加者はレベルの如何に関係なく、心からサッカーを楽しみました。（と思います）後半戦は東軍対西軍に分かれて行いました。

両チームとも、相手キーパー（ゴール内に置かれたミニゴールのこと～ここに入ってもノーゴール）の好セーブにあい、白熱した試合でした。1時間ほど汗を流し、お風呂のあと飲み会に突入しました。なお、結果は発表者清水氏の得点ラッシュでスポ社研究室、東軍の勝ちに終わりました。みなさんお疲れさまでした。

#### <中塚の感想・意見>

2泊3日の筑波は、「懐かしさ」と「知的刺激」、そして人との「出会い」でいっぱいの、満ち足りた時間だった。と同時に、これまで水面下でうごめいていた謎のネットワーク「サロン2002」が、学会においても少しずつ表に出はじめ、大きな力を発揮しはじめたということを感じた。

感想等、本当は色々あるのだが、今日はこのあたりでおしまい。高校生の合宿に向かいます。

さあ、気合入れるぞ～！ 以上